

2 ウォルター卿

『女王メアリーの徹夜祭』より 12 番目の吟遊詩人のうた

「なぜウォルター卿は森の中をさまようのでしょうか
青白い月の光に照らされて
何故ウォルター卿はあんなにも
様変わりされたのでしょうか」

「誰一人敵わぬような
手ごわい騎士と戦う運命なのだ
それも明日 王の御前で
逃げ出せば 一生の恥辱」 5

「クライド家の者に エア家の者に
すぐに立ち上がるようお命じください
ウォルター卿のために戦うものがいなくても
私のために戦うものならいるかもしれません」 10

「口をはさむな いとしい娘よ
口をはさむな 恥を知れ
我が息子のウォルターに
父の名を汚させてはならぬ」 15

「スコットランドの ^{つわもの}兵が
王の御前で身代わりを立てたなど
乙女に噂させ 吟遊詩人にうたわせるのか
神に誓ってそれはならぬ」 20

ウォルター卿は 夜明け前に起き上がり
戦いの支度を整えると
美しい葦毛の馬にまたがって
スターリングの町へと駆けていった

老ハミルトンは城の塔を降りると 25
「我が馬に 鞍を置け
スターリングの町に行く
命をかけた試合をこの目で見るのだ

「目はかすみ 髪も白く
頬はげっそり瘦け果てた 30
だがこの私も
恐るもの無き兵 だった

「馬をここへ」とハミルトン
「ダーシーには大口を後悔させねば
我が一人息子を殺した奴は 35
この父とも戦わねばならぬのだ

「気高い我が息子と戦う者は
槍はしっかり突かねばならぬ
ウォルター・ハミルトンに挑むものには
敵は見事な腕とわかるはず」 40

帯をしめ剣をさして 馬にまたがり
野を越え 山を越え
スコットランドの男らは
決闘をひと目見んと集まった

地主も下男も豪族も 45
群れをなして集まった
百姓も老いた戦士も
お美しいご婦人までもが集まった

ウォルター卿が
元気な葦毛の馬で決闘の場に現れると 50
我らが王は誰よりも先に
ウォルターの健闘を祈った

若く凛々しいその姿
皆の心は高鳴った

涙に曇らぬ瞳はなく 55
涙に濡れぬ頬もない

そのとき王の娘

美しいマーガレットが声をあげた
「もしも勇敢なウォルター卿を失えば
みな父王を酷く責めるでしょう」 60

「どうか決闘をやめさせてください

^{ひざまず} 跪いてお願いします」

「娘よ おまえの願いは聞き入れたいが
それはできぬ それだけは聞き入れられぬ」

「みなにお命じくください」王女は叫んだ 65

「すぐにお命じくください

ウォルター卿のために戦うものがいなくても
私のために戦うものならいるかもしれません

「ダグラスの谷に塔があります

川や丘がある谷です 70

それらをすべて いえ その十倍を

ダーシーを殺したものに与えましょう」

老ハミルトンが声を上げた

青い兜をとると

白髪まなこの奥の眼には 75

涙が一筋光っていた

「お止めください 王女様

あなた様が心を痛めることなどありません

たとえ相手がフランスやスペインの兵つわものであろうとも

ウォルター・ハミルトンに手助けは無用です 80

「かわいい倅ではありますが

やつが逃げ出して 身代わりでも立てるなら

天よ この目を

闇にお包みくだされ」

マーガレットは頬を赤らめ 涙をふいて 85
静かに見守った
毅然としたマーガレットは
この世の乙女の中でもっとも美しい姿

その瞳は夜の丘の上に瞬く 90
宵の明星
その瞳にかかる波打つ髪は
太陽にかかる薄雲のよう

ダーシーが決闘の場に現れると
みな身の毛がよだった
突然の蛇に驚き飛び退くように 95
みなその姿にただ目を奪われた

その顔は恐ろしく 兜は高く
ベルトと帯は輝く黄金
乗った馬の爛々^{らんらん}と輝く目に
見るものはみなぞっとした 100

血気盛んな若者
ウォルター卿の顔を見ると
ダーシーは顔をしかめせせら笑って
威勢よく嘲りの言葉を投げつけた

「なんだ おまえごときがこの俺様に 105
戦いを挑むというのか
俺様がスコットランドの宮廷までやってきて
おまえのような子供と遊ぶとでも思ったか

「若造め 家で乗馬の稽古でもするがいい
情けをかけて 無事に帰してやろう 110
クライドの女子供を相手に
せいぜい武勲を誇るがいい

「この槍が胸に触れるや否や

貴様の胸は串刺しだ
この剣が兜に降りおろされれば
おまえの頭は真っ二つ」

115

「ダーシーよ 自慢をしに来たのでも
ののしるために来たのでもない
お前のような奴を相手に
自慢をしてもはじまらない

120

「明日になったら群集の真ん中で
お前のなした武勲を誇るがいい
今日はそのずうずうしい口を控えられよ
無礼者め いざ勝負」

ぴしりと拍車がかけられて
互いに遠く離れると
馬の頭上に槍を掲げ
互いに狙いを定め 身構えた

125

最初のラッパが鳴り響き 二度目のラッパが鳴り響き
群集の胸の鼓動が高まった
しんと静まったのち 三度目のラッパが鳴り響き
見守る群衆の目はくらむ

130

怒り狂った鷲が
目にも留まらぬ速さで天から下るがごとく
暗闇を引き裂く
炎と燃える雷のごとく

135

灰色の鷲が
風を切って舞い降りるよりも速く
嵐を背後に
空を切る稲妻よりも速く

140

両者ともに息を詰め
駆け抜けた
両者ともに死闘の場内を

駆け抜けた

激しくぶつかり 耳をつんざく音をたて 145
さかんに火花がひらめいた
スターリングの岩や塔までこだました
死闘の場は血に染まった

ウォルター卿の葦毛の馬ははじかれて
ダーシー卿の黒毛の馬は踏みとどまった 150
「ああなんということ」マーガレットは声をあげた
「雄々しいウォルター卿が命絶えるとは」
「ああなんということだ」王は答えた
「かくのごとくに勝敗決すとは」

ウォルター卿は裂けた鎧を脱ぎ捨てて 155
眼をギラつかせて振り向いた
輝く槍を高々と掲げ
まるで天に挑む勢いだった

胸を狙うダーシーの槍先を
巧みにかわし 160
ついには敵の手首をむんずとつかみ
「さあかかってこい」

ダーシー卿は剣を抜き 槍を突いたが
何をやっても無駄だった
ダーシー卿は剣を抜き 槍を突き 165
黒毛の馬に激しく拍車をかけた

ダーシー卿は馬から飛び降りて 兜と剣が
がちゃがちゃと大地を揺るがした
ウォルター卿も馬から飛び降りて 手と手をがしりとつかみ
頭と頭をぶつけて取っ組みあった 170

ダーシー卿の馬は主人のそばに戻り
後ろでぶるぶる震えていたが
ウォルター卿の葦毛の馬は

風より速く逃げ去った
静止も聞かず 門も浅瀬もものともせずに 175
一目散に逃げ去った

森を抜け 山を越え 丘を越え 沼地を抜けて
なつかしの馬小屋へ心不乱
ダーシーの勇猛な黒毛の馬も
ダーシーの槍も真っ平御免 180

「行くがいい」ウォルター卿は声をあげた
「もうこれ以上は望まない
再び武勲を試すことがあっても
おまえに命を預けはしない

「さあ立てダーシー卿よ おまえの剣を試すがいい 185
鎧など捨ててしまえ
大地に立って 素手と素手とで
雌雄を決しよう」

言われたとおりに 兜を投げ捨て
輝く胴衣も投げ捨て 190
鎖かたびらも 籠手も 胸当ても
草の上に放り投げた

「さあダーシーよ お前の恐ろしい名は
敵を震え上がらせてきただろう
一身に浴びてきた賞賛と名誉を 195
一撃ごとにかけて来い

「かっと目を開け 剣をしかと握れ
いざ覚悟
ひとたび振り上げられたスコットランドの剣を
受け止め得る者などいない」 200

「せいぜい頑張れ ハミルトンの若造よ
お礼はたんまりくれてやる
お前の王も お前の国も お前の一族も

運命は皆お前にかかっている

「お前の親父は心からお前の命を惜しみ
ご婦人方は青ざめている
ウォルター・ハミルトンよ
今こそ男になってみろ」

どうしてダーシー卿は
あんなにも速く駆けまわれるのか
どうしてダーシー卿は
気でも狂ったように剣を振るい槍を突けるのか

「かかって来い」ウォルター卿は言った
「ずいぶん威勢がよいではないか
日暮れまで打つだけ打ったら
今度はこっちの番だ」

どうしてダーシー卿は
あんなにも戦場を速く駆け続けられるのか
どうしてダーシー卿の真っ白なシャツが
赤く染まってしまったのか

ウォルター卿の最初の一撃は
ダーシー卿の髭面
「ちくしょうめ」ダーシー卿は毒づいた
「なかなかやるではないか」

ウォルター卿の次の一撃で
どっと血があふれ出し
「これはこれは」ダーシー卿は言った
「これぞ男の一撃だ」

ウォルター卿の最後の一撃は
ダーシー卿の腹を貫き
「これはこれは」ダーシー卿は誓って言った
「お前の剣にはかなわない」

ダーシー卿は剣を高く掲げたまま
地面に倒れ伏した
「なんということだ」ダーシー卿は声をあげた
「もう二度と立ち上がれぬ」

235

ウォルター卿はダーシー卿が
青ざめ倒れ伏したのを見ると
剣の皮ひもをはずし
倒れた敵を抱え起こした

240

見る者たちの喜びの声があふれ
ますます高く響きわたった
皆帽子を空に放り投げた
ボンネットもフードも放り投げた

父親は目に涙を浮かべ
老いた顔をぬぐった
「手をお出し 勇敢な息子よ
こんなに勇敢に育ったとは

245

「王様 これが私の息子です
王様の^{しもべ}家臣としてください
この世のどんな若者も
この息子に代わることはできませんまい」

250

「わが友 老戦士よ
お前の勇敢な息子は
^{しもべ}家臣にしておくにはあまりある
我が息子に迎えよう

255

「我がいとしい娘と結婚させよう
スコットランドの花の娘
名誉の勲章を身につけて
我が右手に侍らせよう

260

「カイルの土地を授けよう

クライドの王家の領土も授けよう
アラン島も授けよう
我が娘への持参金」

王女は微笑み 顔を赤らめ 265
心から喜んだ
美しい頬は赤く染まり
雨に濡れたバラのつぼみのよう

このようにしてクライドのハミルトン家は
王家の血筋に加わった 270
このようにしてスコットランドで一番の
美しい花嫁を手に入れた

(鎌田明子訳)